

るのであるが、その成果は後説に於いて極めて明快に要を盡されて居り、従つて又我々は本書が集録であり、圖説であると共に、又それは最も確實な史料に基いた鑑鏡史であると云ふ事が出来る。(尤も紀年鏡例を持たなかつた鏡式にあつては當然こゝに論及されなかつたが故に、その點、十分注意の拂はるべき事は編者の指摘してあるところである。)

なほ、この外、同範鑄出にかゝる二鏡例の著しい事實や鑄鑄品に對する考慮等致へらるゝところが多いが、就中最も我々の注意をひくのは附説たる紀年鏡贋作についての一項である。即ち、ここでは贋作技巧の各種のものについて、夫々にその識別點を論ぜられてあるが、研究の進むにつれて贋作も又いよく巧妙に、且つ合理的になり來つた事を知る時、我々は如何に『目』を養ふ事が必要であるかを痛感する次第である。そして又編者が警告するゝ如く、とかく研究法には一つの型が出来上り易いものであつて、例へば紀年鏡が極めて重要であると言ふ事になれば機械的に型通りにたゞ鏡例を求め一方と云つた無批判な方法が取られ易い危険、殊に支那考古學の負つてある不幸を併せ思ふ時、我々はこの危険を一層身近かに感するのである。

なほ編者は卷頭に於いて從來、發掘調査による資料の重要性のみが公式的に取りあげられ、他はそれが遊離したる遺物であると言ふ見地にこだはつて、全く閑却され勝ちなる弊を指摘し、好事家のなる蒐集ならばとにかく、是等遺品の最も確實なるものを、而も多數例を求める事によつて、そこに確實な結果を導いて行く

事ができるならば、それは發掘による根本資料の效果をも、より充分發揮せしめるものである事を強調されたが、これら三つの點は單に鑑鏡の事に限ることなく又考古學一般についての重要な警告である事を特に注意したいと思ふ。(桑名文星堂刊、定價貳拾圓、(岡田芳三郎)

大和唐古彌生式遺跡の研究

——京都帝國大學文學部考古學

研究報告第十六冊——

末永雅雄

小林行雄 共著

藤岡謙二郎

大和平野のほゞ中央に位置する磯城郡川東村の唐古池を中心とする彌生式遺跡は、今から四十年前に高橋健自博士によつて學界に紹介され、夙にその出土遺物によつて學者の注意を惹いてゐたものである。たゞ昭和十一年十二月に、遺跡の中心をなす唐古池が國道第十五路線敷設工事の爲に採土場選ばれ、其の結果、夥しい遺物が發見されるに及び、京都帝國大學考古學教室は、奈良縣當局と協力し、前後三ヶ月に亙る現地調査によつて重要且つ多量なる出土品を採取し得たのであつた。爾來數年間、末永、小林、藤岡の三氏は、各々分擔して此の難澁な整理に當たられ、遂に今回、老然たる本報告を完成されたことは、洵に斯界の慶事であつて、著者等が茲まで運ばれた勞苦の大なるを多とすべきで

ある。

本書は先づ前三章に於いて、遺跡の研究史、其の歴史地理學的、地形學的考察及び遺跡の一般的状態を記述し、第四章に於いては、出土せる豊富なる彌生式土器を五型式に分類して詳細に記載してゐる。そして第五章では、本遺跡の出土例によつて始めて内容を明にした彌生式土器の彩文、原始繪畫、記號的文様に就いて論述し、また挿描文に依る五型式の土器の通觀を試み、終りに此等の五型式の土器は併存したのではなく、各々時期を異にして繼起したといふ推斷を下してゐる。一體、近畿地方に出土する彌生式土器に、形式學的に聯關する五形式の存することは、既に知見に上つてゐた處であつたが、本遺跡に於いて注目すべきは、遺跡を構成する堅穴及び遺物包含地より各形式が純粹に出土する例が多い事實である。かくして該五形式が一時代に併存したのではなく、實に其等は彌生式土器の系統的發展の序列として時期的に把握されるべきことが解明されたのである。

木器類及び植物製品の裕さは、本遺跡の價値をいたく昂めたものであるが、其等の記載に充てられた第六章に於いては、木器と土器との形態的交流や木製農耕具の高度な發達が強調され、土器について夥しく出土した石器の記述が試みられてゐる第七章では、時期によつて石器の材料に差異のある事實が指摘されてゐる。第八章では土製品及び骨角牙製品を叙べ、第九章では、生物學的、林學的研究を基礎として自然遺物を記述し、更に當代人の生活と遺跡の様相にまで論觸してゐる。殊に、家畜や栽培植物の問題は、

著者等の最も留意する所となつてゐる。第十章は後論として總括に充てられ、先づ遺跡の一般的性質、住居用と貯藏用の堅穴の存する事實、及び高床家屋の發生等を叙べ、ついで用途による土器の分化發達、木工術の驚くべき發達、罎轆の存在、金屬利器の存否等を論述され、最後に該遺跡から少量出土した繩文式土器に依つて、彌生式土器と其れとが場所を異にして時間的に併存したことを説いてゐる。

以上は、本書の概要に過ぎないが、豊富かつ貴重な遺物を學界に贈つた唐古遺跡が、本書の如き精細なる報告書を俟つて始めて點睛の美をなしたことは言ふまでもないのである。實に本遺跡によつて、吾人の彌生式文化に關する知見は、其の内容の深さと廣さを著しく加へたのであつて、本書こそはかゝる彌生式文化の寶庫に、吾々を導入せしめるものである。然も著者等は、叙上の如き裕かな遺物を前にしながらも、あくまで事物に即して論述し、聊も議論の逸脱を許さぬのであつて、かやうな慎重な態度は、創意に富んだ報告技術と共に、本書をして學界の指標たらしめてゐるのである。(續四六倍版。卷首圖版一葉。本文二五二頁。圖版一〇八葉。桑名文星堂發行。定價參拾圓。) (角田文衛)

東方文化研究所研究報告第十七冊

古代支那工藝史に於ける帶鉤の研究

長 廣 敏 雄

最近の支那考古學研究は支那古銅器に於て周樣式・漢樣式を分